

岐阜県における古代・中世寺院の立地と変遷

小野木 学

はじめに

岐阜県では平成 30 年度から令和 4 年度までの 5 年間で「岐阜県古代・中世寺院跡総合調査」（以下、「総合調査」と記す。）を実施し、令和 4 年度末に報告書を刊行した（岐阜県文化財保護センター 2023、以下、本文中の引用文献は「岐阜県文化財保護センター」を「県文財セ」、「市（町村）教育委員会」を「市（町村）教委」と記す。）。総合調査では、岐阜県文化財保護センターの職員が現地調査や整理等作業、報告書作成を実施し¹⁾、県内 3,464 か寺の現地確認を行い、1,918 か寺の古代・中世寺院跡を見出し、現地で平場²⁾を確認した寺院跡（以下、遺跡名以外は「寺院」と記す。）のうち 127 か所の地形観察図を作成した。また、その総括では寺院の成立時期、立地、空間構造、宗派等の検討を詳細に行い、大きな成果を得た。しかし、寺院の成立年代等は「各自治体史等の文献資料、発掘調査・遺跡詳細分布調査資料（発掘調査報告書等）」に加えて、各地域・関係社寺に残る口承・伝承等を含めて集計」（県文財セ 2023）しており、同報告書の各論で上川通夫氏が指摘しているように（上川 2023）、文献史料と考古学的事実との整合的な理解が困難な寺院への対応が一つの課題として残った。

上川氏のいう考古学的事実とは、考古学的手法によって明らかとなった遺構・遺物等に関する事実である。かつて藤澤一夫氏は、『日本考古学講座』において、寺院の遺構を対象とする調査には発掘観察と表面観察による現状調査があるとし（藤澤 1956）、文化庁文化財部記念物課が監修した『発掘調査のてびき』の「寺院の調査」でも、遺跡情報の事前収集項目として、最初に地表観察が挙げられている（文化庁文化財部記念物課監修 2013）。

そのため、小稿では岐阜県で詳細分布調査や発掘調査が実施された主な古代・中世の寺院を対象とし、その立地と平場の配置を再検討した上で、それらの調査から推定できる寺院の存続年代等を整理する。そして、総合調査において文献資料等から得られた成果を含めて、県内における古代・中世寺院の変遷について検討したい。

1 岐阜県内の山麓・山腹に立地する主な寺院

岐阜県における寺院の創建は 7 世紀中頃から後半に始まり（井川 1994、早川 2003）、その頃の寺院の多くは平地に位置する。その後、山腹等での造営が増加していくが、具体的に岐阜県内における寺院の成立時期や立地の詳細に関する検討は牛丸岳彦氏や大下永氏などの論考（牛丸 2011、大下 2018）の他には、それほど多くはない。

一方、上原真人氏は「少なくとも畿内では、すでに 7 世紀代に、僧寺と尼寺、平地寺院と山林寺院というネットワークが形成されていた可能性が高い」（上原 2002）とし、伯耆や三河でも畿内と同様の事例が確認できることから、その地域を「少なくとも畿内およびその周辺」とし（上原・梶川 2007）、「平地寺院と山林寺院とがセットで機能するという情報が、7 世紀後半に各地に伝播した」（上原 2011）と推定した。このように、畿内を中心に寺院創建初期の段階から地方でも山林寺院の存在

が指摘され、畿内周辺に位置する岐阜県においても同様の状況であった可能性が考えられた。

なお、山林寺院とは、その名称を提唱された斎藤忠氏は「僧侶などが山林修行を目的として、建立した寺院」とし、「山麓、山間、山の懷、山頂付近などで、その周辺に叢林があつて静寂な境地に立地しており、又その寺の寺域、建物も、その地勢に順応して定められて建立された寺」と定義付けられた（斎藤 1996）。修行本位かどうかの判断は難しい場合があるものの（梶川 2007）、小節では氏の定義に従い、山麓や山腹、山頂付近などに立地する寺院を対象とし、そのうち、詳細分布調査や発掘調査が実施された主な寺院について紹介したい³⁾。なお、寺院が立地する地形は山麓等（山麓、丘陵、尾根の先端付近等）、山腹等（山の中腹、尾根・山頂付近の鞍部等）、山麓から山腹等の3つに分けて記載する。

（1）山麓等に立地する寺院

①正家廃寺跡（恵那市）（図1）

正家廃寺跡は北東から南西方向に連なる山塊の麓の河岸段丘上に位置する。段丘下の現集落と金堂跡との比高差は約30m、斜距離は約300mである。昭和51～55年度、平成4～11・25～29年度に発掘調査が実施され、東西110m、南北70mの寺域⁴⁾を有し、主要伽藍を法隆寺式に配置する古代寺院であることが判明した（恵那市教委 2000・2018）。築地で囲まれた寺域は伽藍地と東区に分かれ、金堂、塔、講堂、回廊は同一の主軸方位で建てられており、座標北に対して6度傾いている。また、8世紀中頃には金堂基壇等が完成し、9世紀後半の主要伽藍の火災を契機として10世紀前半頃には廃絶したことが判明した。正家廃寺は定型化した伽藍配置を有するが、北下がりの地形上に位置しているため、伽藍の正面は集落域とは反対方向を向き、地形的には高所を正面に見据えていることが特徴である。

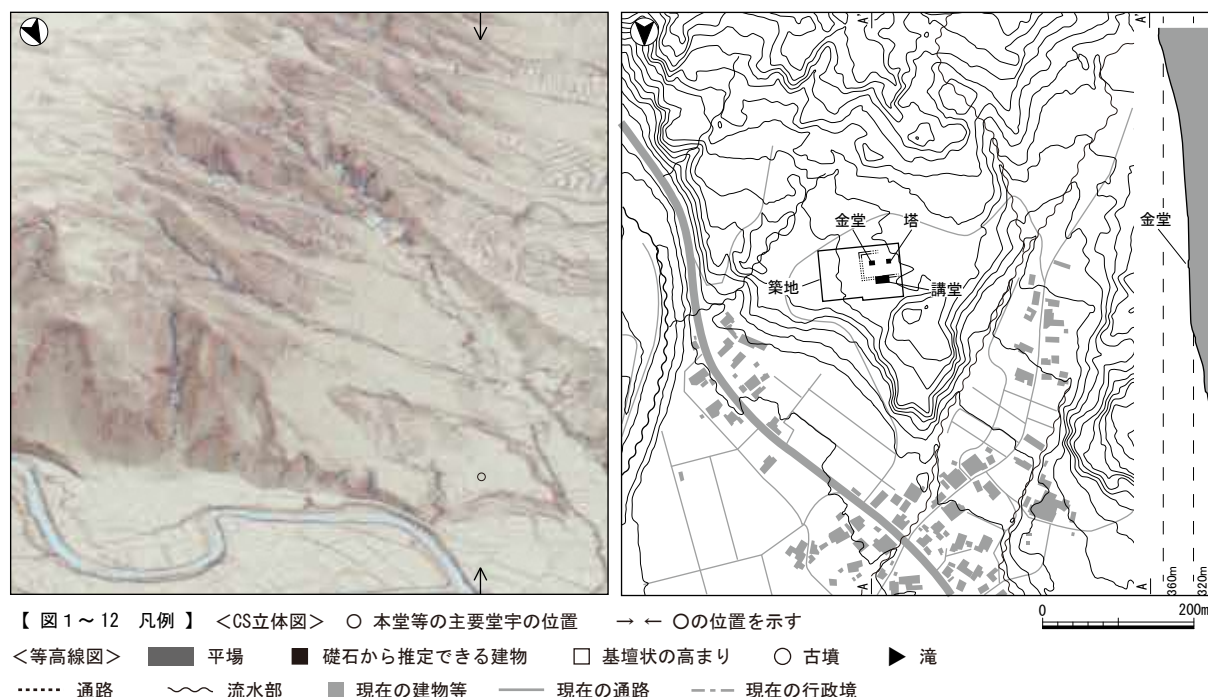


図1 正家廃寺

②日焼遺跡（高山市）（図2）

標高 821 m の三枝山の南麓に所在し、山麓の現集落と仏堂（SB04）との比高差は約 20 m、斜距離は約 140 m である。仏堂（SB04）が位置する場所は南北約 100 m の緩斜面の最奥であり、平成 27・28 年度に実施された発掘調査の結果、SB04 は 5 × 3 間の礎石建物で須弥壇内部の土坑から八稜鏡が出土した（県文財セ 2021）。SB04 周辺の出土遺物としては灰釉陶器の碗・皿・多口瓶、ロクロ土師器碗・皿、螺髪、塑像片、硯、瓦、釘類、筒状銅製品などがある。建物の主軸方位は真北であり、出土遺物から 10 世紀後半の建物と考えられている。また、SB04 と同時期の建物として SB07・08 があり、いずれも SB04 よりも約 3 ～ 5 m 低い標高で検出されている。一方、SB05・06・09 は 10 世紀前半の掘立柱建物で、SB09 は仏堂と考えられ、これらの主軸方位は真北からずれている。なお、同遺跡からは 8 世紀後葉の多口瓶や鉄鉢型土器が出土していることから奈良時代に何等かの信仰利用があったと考えられるが、9 世紀代の建物等は未確認であり、10 世紀の仏堂形成までは連続しないようである。

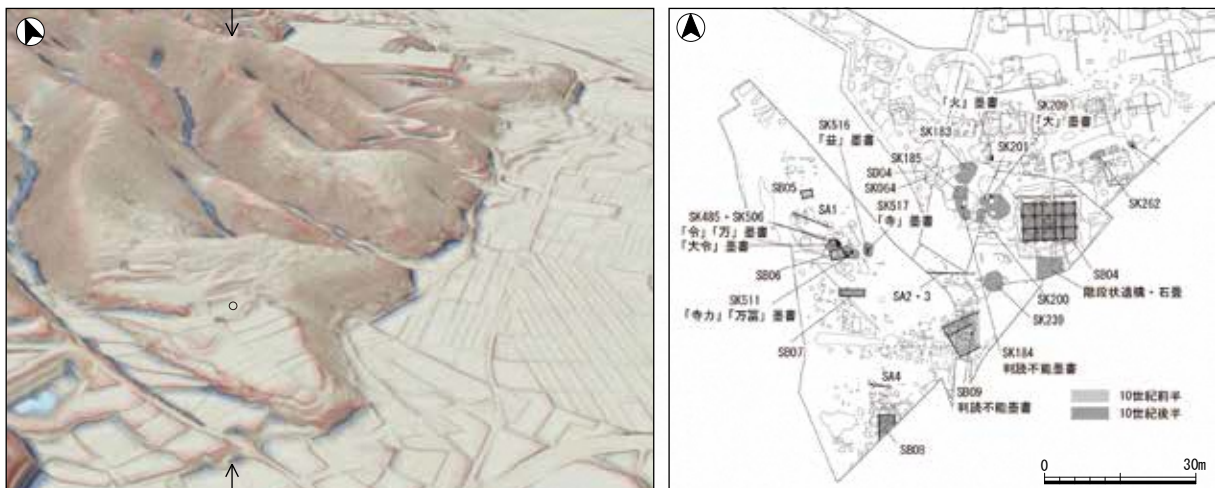


図2 日焼遺跡（遺構図は県文財セ 2021 を引用）

③寺屋敷遺跡（揖斐郡揖斐川町）（図3）

揖斐川本流と磯谷の合流地点に突き出た尾根の先端に位置し、山麓と礎石建物跡との比高差は約 15 ～ 20 m である。平成 5 ～ 7 年度に実施された発掘調査の結果、尾根を段切りした平場上に 3 × 4 間の礎石建物が検出され、灰釉陶器の碗・皿や多口瓶、螺髪、釘類が出土した（県文財セ 2001）。建物の主軸方位は真北ではなく尾根筋に沿う方向であり、出土遺物から 10 世紀から 11 世紀前半頃に機能していたと考えられる。また、寺屋敷遺跡の南側には磯谷口遺跡があり、寺屋敷遺跡と同時期の灰釉陶器とともに緑釉陶器片 2 点と黒色土器片 4 点が出土している。このように、寺屋敷遺跡の建物は尾根の先端に位

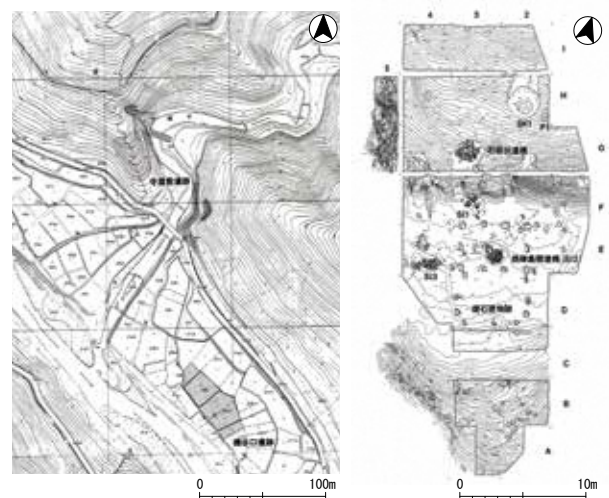


図3 寺屋敷遺跡（県文財セ 2001 の図を引用）

置する小規模な単独の仏堂で、その麓には寺屋敷の仏堂に関与するような人々が住んでいた可能性が指摘でき、富永樹之氏は村落内寺院の一例としている（富永 2006）。

④柏尾廃寺跡、光堂寺廃寺跡、竜泉寺廃寺跡（養老郡養老町）（図 4）

南北に延びる養老山地の東山麓に位置し、南から北に向かって柏尾廃寺跡、光堂寺廃寺跡、竜泉寺廃寺跡がある。柏尾廃寺は柏尾谷と勢至南谷の間、光堂寺廃寺は勢至南谷と勢至北谷の間、竜泉寺廃寺は行平谷と威徳谷の間に位置し、いずれも谷川に挟まれた緩斜面上に平場が展開し、背面の山腹に窟や滝、墓域等が認められる。また、山麓に沿って近世伊勢街道が通過しており、現状では、街道からそれぞれの寺院まで直線的な通路（参道）が延びている。なお、寺伝や近世の記録では、いずれの寺院も天平年間（729～749）に建立され、永禄 5（1562）年に兵火により焼失したとされている。また、いずれの寺院も法相宗から天台宗に改宗している。

柏尾廃寺は、緩斜面の最奥に現状で 5×3 間以上の東面する建物の礎石が残り、ここが主要堂宇跡と考えられる。その北側には一辺約 4.5 m の石列を伴う基壇跡があり、昭和 14 年の調査では関市日龍峰寺の多宝塔（鎌倉時代）の礎石の配置と同一であることが指摘されている（小川 1939）。主要堂宇跡の東面には現集落から直線的な通路が延び、その両側には通路に直交する方向に複数の細長い平場が展開する。平場は現存徳寺付近まで確認でき、東西方向に延びる 2 条の通路によって約 100 m 幅で 3 列に区切られる。一方、主要堂宇跡の背面の山腹には墓域が展開し、多数の石塔が散在している。石塔の多くは「千体仏」（図 4－写真左上）と呼称される場所に集められており、そこでは複数の石塔未成品が確認できる（小野木 2019a）。また、墓域の北西側の谷筋には奥行 2～3 m の窟があり、窟の上方の尾根筋には集石が認められ、集石からは経筒片が採集されている⁵⁾。なお、窟の西側の谷筋を登ると小規模な平場が 3 段確認でき、そこでは鉄滓が採集でき、さらに登ると切り立った砂岩の露頭があり（図 4－写真右上）、そこには砂岩の剥片が堆積している。

光堂寺廃寺には緩斜面の最奥に日吉神社が位置し、そこに複数の礎石が残る平場があることから、ここが光堂寺廃寺の主要堂宇の一つであったと考えられる。日吉神社の西側から北側の山腹には巨岩や窟（図 4－写真左下）、墓域があり、窟は幅約 5 m、奥行約 4 m で、その内部には四方梵字を刻む一石五輪塔（若しくは二石五輪塔）や宝篋印塔の部材が確認できる。また、墓域では集石や石塔が散見でき、過去に古瀬戸瓶子が出土している。日吉神社から勢至南谷までの区域はやや傾斜が強くなるが、柏尾廃寺跡と同様に細長い平場が階段状に広がり、石仏等が散在している。そこには従来から複数の古墳の存在が知られており、平場造成の際にも古墳の墳丘を削平せずに残しているようである。その最奥の山腹は急傾斜ながら複数の平場が確認され、中世陶器が採集されている。さらに、その北側の谷筋には高さ約 2～5 m の段差が複数の箇所で見られ、滝として景観が備わっている（図 4－写真右下）。一方、山麓の伊勢街道から光堂寺廃寺跡に至る辻には 16 世紀の文献史料が残る「勢至鉄座之址」があり、現在でも多数の鉄滓が採集できる。なお、応永 27（1420）年の「土岐善弘書状案」には光堂寺廃寺の寺地が記されており、その西端である一瀬山之峯は養老山地頂上の尾根付近と推定されている（養老町教委 2007）。このように、光堂寺廃寺では寺院地が山麓に展開しつつも、寺地は山全体に及んでいることが文献から推定できる。

竜泉寺廃寺は、緩斜面の最奥に複数の礎石が確認されており、ここが主要堂宇跡と考えられる。その前面には「堂の庭」と呼ばれる広い平場をはじめとして、階段状に造成された大小 60 以上の平場

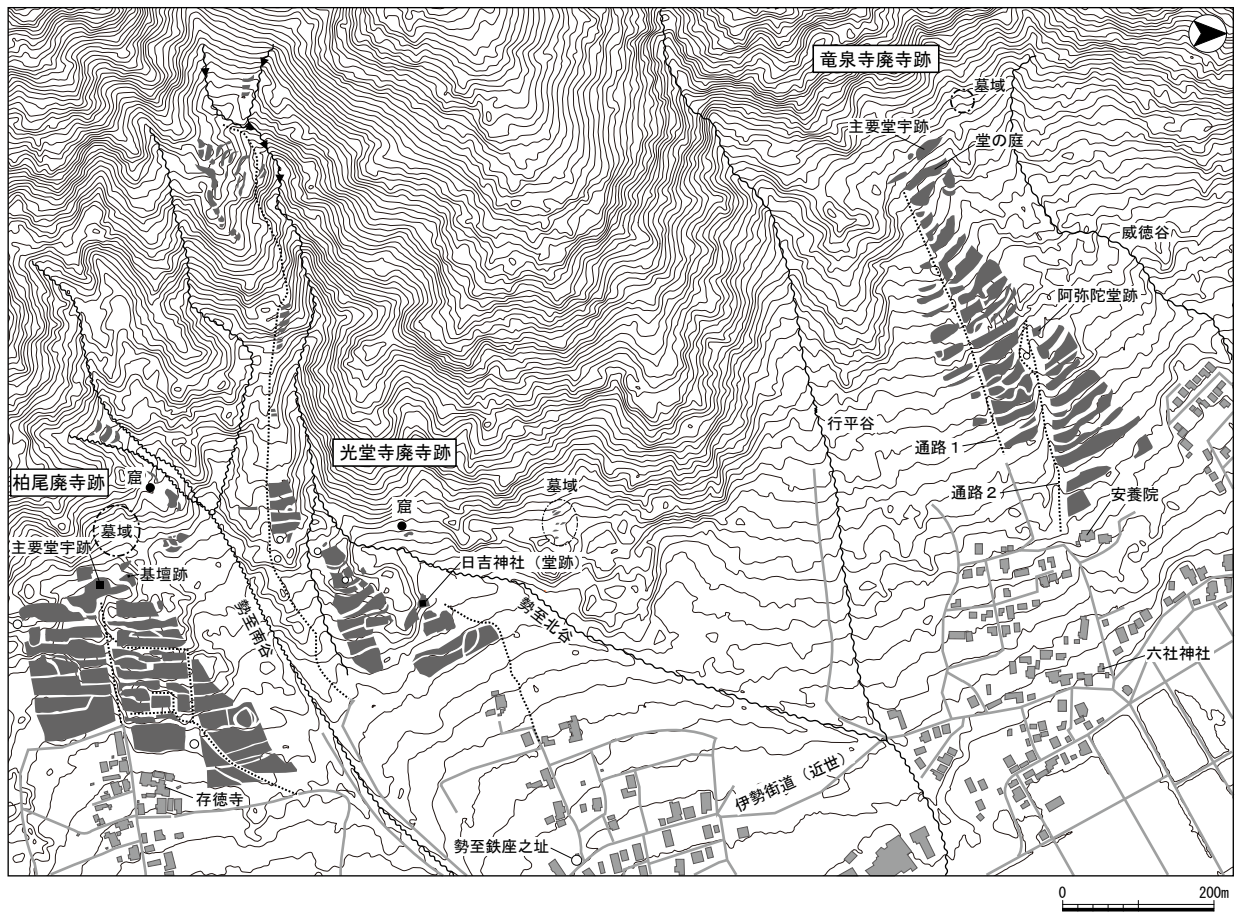
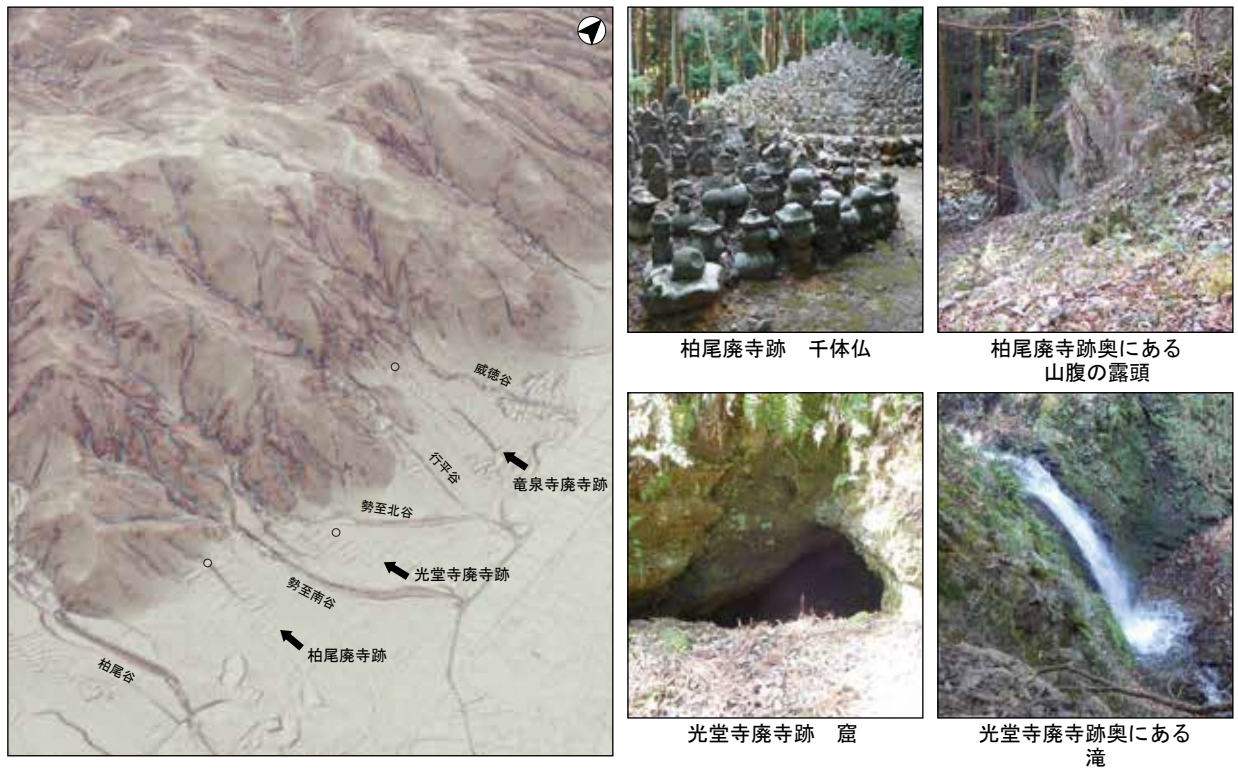


図4 柏尾廃寺跡・光堂寺廃寺跡・龍泉寺廃寺跡

が残る。この中央には東西約 360 m にわたる直線通路（通路 1）が延び、さらにその北側には谷地形を利用した通路（通路 2）があり、平場群を北側・中央・南側の 3 区域に分けている（養老町教委 2016）。通路 1 は「堂の庭」に至るまで南北両側に多くの平坦面があるものの、明確な出入口を認めることができないことから、この通路は「堂の庭」に至ることを主目的としていた可能性が指摘されている。一方、通路 2 は北側の平場の最奥に位置する「阿弥陀堂跡」に至る道であり、阿弥陀堂より下位にある平場群にアクセスできる出入口を各所で確認できる。なお、通路 2 は伊勢街道沿いの六社神社のある辻から竜泉寺廃寺跡に至る現道の延長に位置することから、竜泉寺廃寺には創建当初から伊勢街道付近まで通路が延びていた可能性が指摘できる。

さて、いずれの寺院でも遺跡詳細分布調査が実施され、寺院の存続時期が推定されている（養老町 2007・2016）。柏尾廃寺は本堂跡若しくはその北側で 8 世紀から 11 世紀後半までの遺物が採集されており、この頃には「山林修行場を思わせる場所をもっていた」とされている。そして、11 世紀末から 12 世紀後半の遺物分布域が拡大し、12 世紀末から 13 世紀前半の遺物量が多くなり、16 世紀後半以降の遺物は寺域の中心部では採集されていない。一方、光堂寺廃寺と竜泉寺廃寺は古代には機能しておらず、その始まりは 12 世紀初頭から後半であり、16 世紀後半に衰退するとされている。そのうち、竜泉寺廃寺跡の直線通路（通路 1）は、13 世紀末から 14 世紀前半頃に整備された可能性が高いとされている。

（2）山腹等に立地する寺院

①光寿庵跡・石橋廃寺（高山市）（図 5）

光寿庵跡は山腹の谷奥に、石橋廃寺は山麓に位置する。光寿庵跡と山麓の集落域との比高差は約 120 m、斜距離は約 430 m であり、光寿庵跡と石橋廃寺跡との比高差は約 120 m、斜距離は約 700 m である。光寿庵と石橋廃寺の成立年代に関する記録はないが、光寿庵は室町時代以降に地域の武将である広瀬氏の菩提寺であったという伝承があり、長野県大湊村資料館所蔵の鰐口には「飛州広瀬向上庵地蔵堂永享八年八月二四日」の銘文が残るように、15 世紀代までは存続していたようである。

光寿庵跡には山腹の谷部の最奥に広い平場があり、その中央付近には石列を伴う基壇が確認できることから、ここが主要堂宇跡と考えられる。その背面には湧水点から導水される池があり、前面にも広い平場が確認できるものの、平場に至る通路が虎口状に屈折するなど後世の改変が認められる。また、本堂から南へ約 80 m の高台には一辺約 6 m の方形の基壇状の高まりが確認でき、その中央には石塔が据えられ、平場の周囲には土塁と溝が巡る。光寿庵跡では 7 世紀後葉の須恵器や古代瓦が昭和初期に採集されており、古代瓦には人物を描いた戯画瓦もある（国府町史刊行委員会 2011）。

石橋廃寺は昭和 60・61 年度に発掘調査が実施され、礎石建物が検出された（国府町教委 2005）。その出土遺物には円面硯や暗文土師器、複数の古代瓦などがあり、特に平瓦に線刻された人物戯画や鳥描戯画、花卉文などが注目できる。さらに、光寿庵跡と同范の瓦が出土しており、人物戯画瓦の存在も共通している。石橋廃寺の出土遺物の時期は 7 世紀後葉～10 世紀であり、特に 7 世紀末～8 世紀にかけては暗文土師器や新羅系軒丸瓦、重圈文軒丸瓦などの出土から近畿の文化内容が色濃く反映されていると推定されている⁶⁾。このように、光寿庵跡と石橋廃寺跡は同范瓦の存在から同時期に存在していた可能性が高く、少なくとも 8 世紀以前において山麓と山腹に対置した宗教施設として機能していたと考えられる⁷⁾。

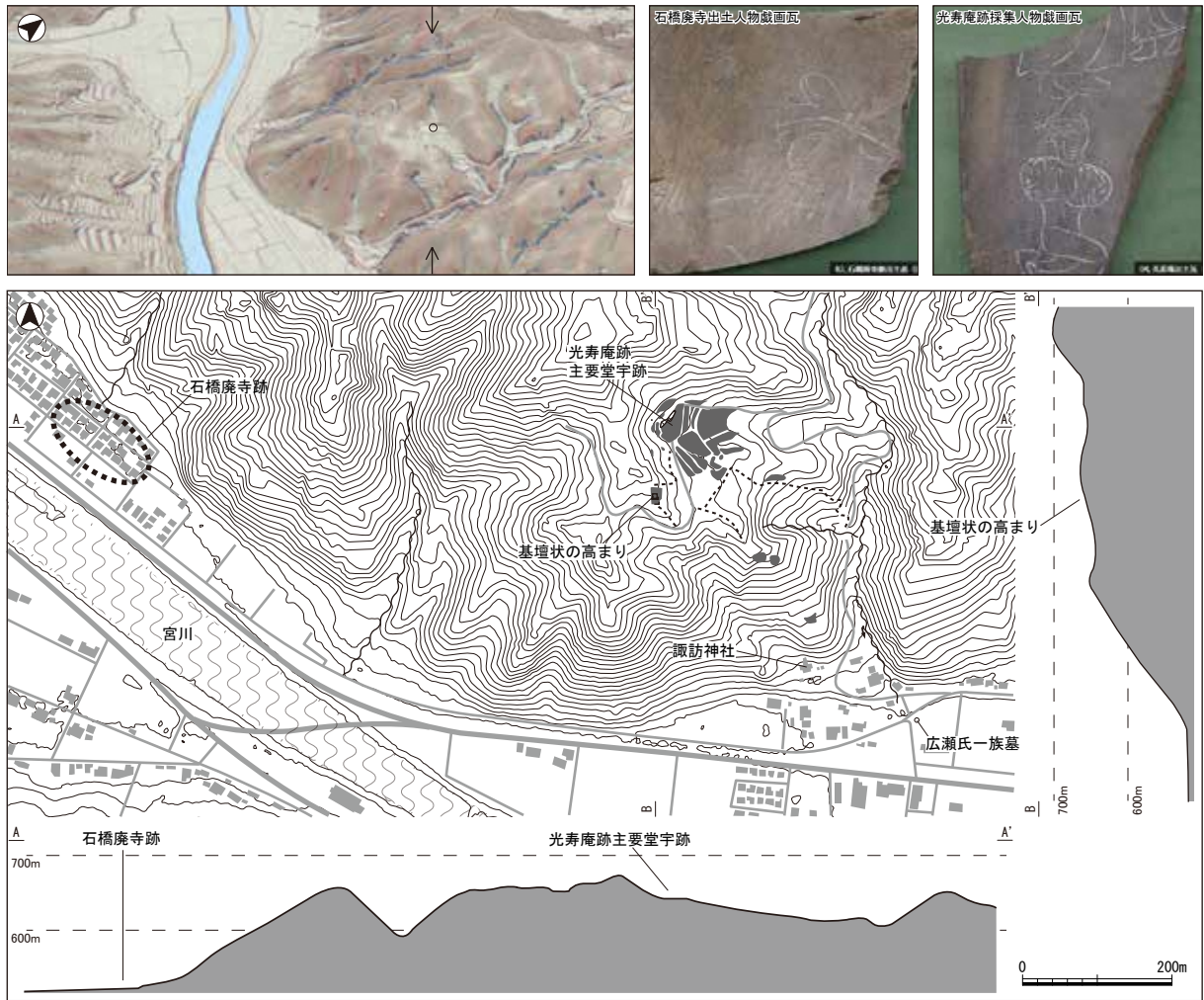


図5 光寿庵跡・石橋庵寺跡（右上の2枚の写真は高山市教育委員会提供）

②横蔵寺旧境内（揖斐郡揖斐川町）（図6）

山頂から延びる尾根の鞍部に位置する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と旧境内本堂跡との比高差約260 m、斜距離約650 mを測る。横蔵寺縁起では延暦22（803）年に、この地に草堂を建てたとされ（坂本1982）、永禄8（1565）年に織田信長が寺領を没収したため伽藍が荒廃し、寛永元（1624）年に古堂の閉鎖と山麓への仮堂設置が行われたとされる。

本堂跡とされる場所は谷の最奥に位置し、基壇上に5×5間の礎石建物を有し、その右手に池が残る。さらに右手前の高位の平地には塔跡と考えられている礎石を有する基壇が確認でき、本堂跡から池と塔が一望できる景観であったと考えられる。また、谷の左手前には仁王門とされる3×2間に配置された礎石群があり、そこから等高線に沿って延びる通路の両側には、等高線に沿うような細長い平地が展開している。本堂横の池の周囲では湧水が認められ、本堂跡の背面には巨石の露頭がある。また、墓域は集石を伴い、本堂から丸山を挟んだ西側の尾根に位置する。なお、本堂跡の礎石建物の方位は地形に沿っており、本堂正面の斜面や仁王門から本堂跡に至る通路沿いには石積みを確認できる。

横蔵寺旧境内では詳細分布調査がなされ、灰釉陶器や中世陶磁器が採集されている（県文財セ2023）。灰釉陶器は本堂跡において1点のみが採集され、その型式は黒笹90号窯式（9世紀後半）⁸⁾

である。一方、中世の陶磁器は多く採集され、特に山茶碗第5型式（12世紀後半～13世紀前半）前後の遺物が多い。灰釉陶器の採集は1点のみであるが、現在の横蔵寺には奈良時代末から平安時代初頭の作と考えられる銅造薬師如来立像が残され（清水 1990）、横蔵寺縁起による成立年代も加味し、現時点では、横蔵寺旧境内には9世紀後半頃に本堂跡を中心とする範囲に小規模な仏堂等が存在していたと考えたい⁹⁾。そして、採集遺物が多数ある12世紀後半から13世紀前半頃に本堂跡を中心とする谷部において寺院地が整備されたと考える。また、報告された採集遺物のうち最も新しい遺物は山茶碗第8型式（13世紀後半から14世紀前半）であるが、現地に現存する石塔には扁平化した組合せ五輪塔の部材や一石五輪塔など16世紀後半に位置付けられる（小野木 2019b）ものも散見される。

なお、横蔵寺旧境内から尾根伝いに約4300 m南東に進むと、華厳寺に到達する。華厳寺は平地から延びる谷の最奥に位置し、延喜年間（901～923）に額を与えられた定額寺に列する寺院であり（菱田 2023）、平安時代の早い時期の作とされる毘沙門天立像が残る（清水 1990）。発掘調査等は実施されていないものの、文献や有形文化財の存在から平安時代には機能していた可能性が指摘できる。そして、地元では華厳寺を「谷の寺」、横蔵寺を「山の寺」と呼称しているように、両寺は現在でも平地と山地にある一連の寺院として認識されていることから、過去にも尾根筋を利用した往来があった可能性がある。

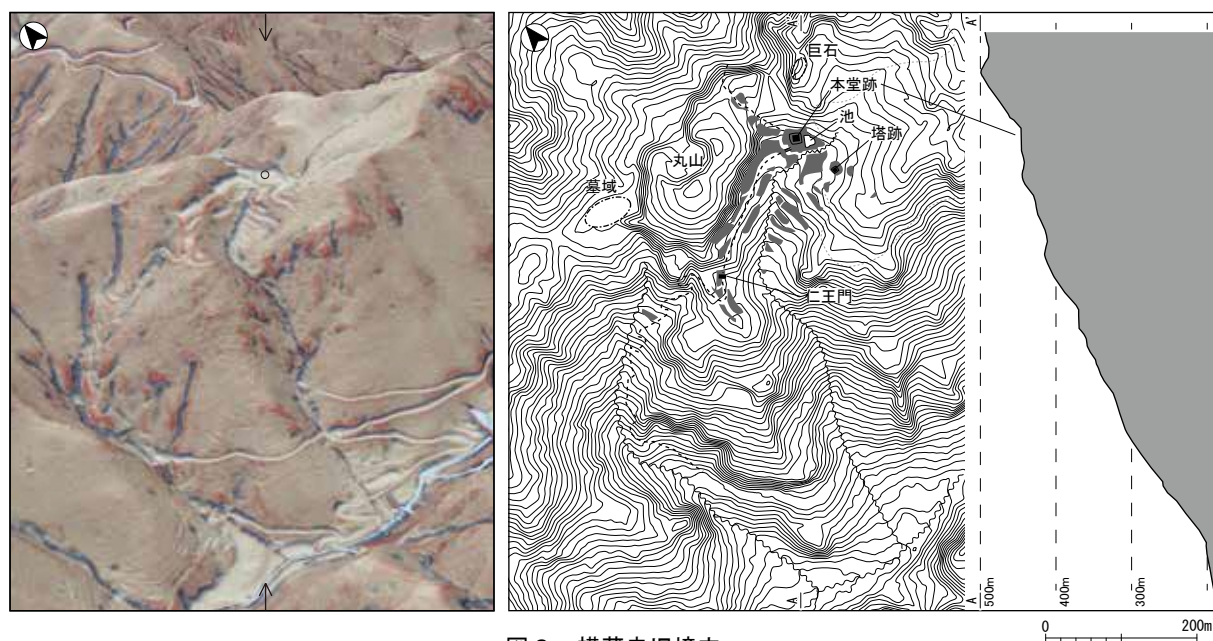


図6 横蔵寺旧境内

③白雲山観音堂（郡上市）（図7）

標高471 mの白雲山山頂から南へ延びる尾根の鞍部に位置し、山麓の集落域と本堂跡との比高差約130 m、斜距離約310 mである。昭和48年と平成5・6年に発掘調査が実施され、礎石建物や中世墓が検出されている（名古屋大学考古学研究室編 1974、大和町教委 1994）。

発掘調査では、最も高所にある広い平場からは建物等の遺構が検出されず、その一段下位の東端の平場にて5×5間の礎石建物が検出され、礎石下の炭化材の年代測定結果（AD1240年±90年）から鎌倉時代以降の建物と推定された。建物の主軸方位は真北ではなく、平場の長軸に沿う方向である。また、この平場からは中世陶器とともに10世紀代の灰釉陶器が複数出土している。一方、最高所の

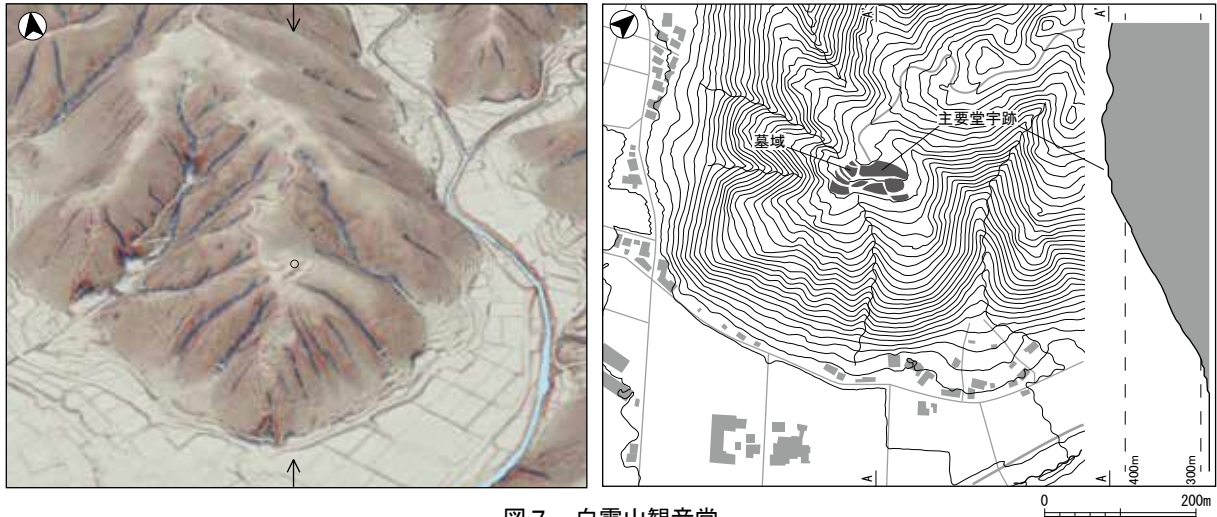


図7 白雲山観音堂

平場からは懸仏の御正体である聖観音の金銅仏（座高9cm）が出土しており、他にも天保14（1843）年に山上で懸仏が採集されている（佐藤編 2019）ことから、この平場に主要堂宇があったと推定したい。なお、最高所の平場の西端では、中世後期の石塔や集石遺構、蔵骨器などが検出され、墓域を形成していることが判明した。墓域の出土遺物は古瀬戸前Ⅱ期から後Ⅰ・Ⅱ期（13世紀前半から15世紀前半）までの壺・瓶類や美濃須衛水注（藤澤 2001）などとともに、一字の「福」の字を陽刻した高さ4.2cmの銅製印もある。このように、発掘調査の結果、本寺院では10世紀代に何等かの小規模な宗教施設があり、13世紀頃には主要堂宇が創建され、15世紀代には衰退したと考えられる。

④大威徳寺跡（下呂市）（図8）

標高約1,400mの拝殿山から南西に延びる尾根の先端付近の、旧益田郡と恵那郡の境に位置する天台宗の寺院である。文政12（1829）年に校訂、浄書された『飛州志』に引用された『濃州長滝寺阿妙院所在経文末書』から推定される大威徳寺の寺地は南北約6km、東西約5kmと推定され（下呂市教委 2007）、その中央に位置する御厩野集落と本堂跡との比高差は約190m、斜距離約940mを測る。『飛州志』などによると、本寺院は源頼朝発願で文覚上人創建の伝承をもち、弘治2（1556）年の威徳寺合戦で堂塔の多くを焼失し、天文13（1585）年の飛騨大地震で壊滅したと伝えられている。

本寺院跡は、平成15～20年度に範囲確認調査が実施され、本堂、本堂西建物、山門、拝殿、鎮守などの建物跡と池跡、中世墓などが検出された（下呂市教委 2007・2011）。本堂跡は桁行5間の北向きの礎石建物で、正面には向拝が取り付けられる。本堂西建物跡は4×3間の北向きの礎石建物で、本堂跡と同様に向拝が取り付けられ、本堂と軒廊で連結している。山門跡は3×2間に配置された礎石が検出され、山門から本堂跡に向かって緩やかに上る直線的な通路が延びる。本堂跡から東方の尾根斜面には5×2間の西向きの礎石建物跡と、さらにその奥の尾根頂部には5×4間の西向きの礎石建物跡が検出され、前者は拝殿跡、後者は鎮守跡と推定されている。なお、拝殿跡の前面には高さ約4mの石積が残り、その北側には湧水点がある。一方、本堂跡の北北西には、林畑谷を挟んだ緩斜面上に地形に沿って配列された中世墓が検出されている。なお、本寺院からは折戸53号窯式期～東山72号窯式期（10世紀前半～後半）の碗・皿類や多口瓶が出土しており、10世紀代から信仰利用が始まったと考えられる。そして、寺院創建は出土遺物や本寺院で発見された懸仏の存在などから12世

紀に遡る可能性が指摘され、13 世紀代に規模が拡大し、およそ 17 世紀代までの遺物が出土している。

このように、本寺院は北東から南西方向に延びる尾根上に位置するものの、本堂などの建物の向きや本堂から山門に至る通路などは真北を意識しており、古代的な要素を保持している。また、拝殿跡や鎮守跡などを除くと平場間の高低差が比較的小さいこと、方形あるいは長方形を意識して区画された中央付近の平場とその外縁にある地形に沿って弧を描くように整地された平場があること、本殿跡を中心に東西方向にも通路が延びていること、などの特徴も看取できる。

一方、寺域外の山麓と本寺院を結ぶ通路は、山門や本堂付近から般若谷へ延びる通路 1 と、史碑南建物付近から西へ延びる通路 2 が想定できる。通路 1 は美濃と飛騨を結ぶ当時の主要街道（近世の南北街道付近（岐阜県教委 1983））から般若谷筋を通り、寺院まで延びていたと考えられ、寺院の入り口には山門が設けられている。一方、通路 2 は御厩野集落と寺院を結び、その途中には米搗平や清水坂の名称が残る。御厩野集落から本寺院までは比較的緩やかな緩斜面が続く（図 8 B-B'）、その最奥の高所に鎮守・拝殿が位置し、さらに、その背面の般若谷を挟んだ対岸に美濃・飛騨の国境となる山稜が延びている。なお、美濃側の最も近い平地には牧水無神社があり、この付近には「威徳寺関係の堂塔遺址が多い」とされている（加子母村 1972）。

⑤円興寺旧境内（大垣市）（図 9）

山頂から延びる尾根の鞍部に位置する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と旧境内本堂跡との比高差約 105 m、斜距離約 560 m を測る。寺伝では延暦 9 (790) 年にこの地に仏堂が建てられ、天正 2 (1574) 年に織田信長の兵火にかかり焼失し、その後、慶長 6 (1601) 年に雷火によって再び焼失したとされる。

寺院地は通路 1・2 沿いに展開しており、通路 3 には「山門」¹⁰⁾ と呼ばれる 3×2 間に配置された礎石群がある。「山門」から東斜面に沿って延びる道は金生山への「虚空蔵道」であり、北へ延びる道が主要堂宇の展開する平場への参道となる。通路 2 のある谷部の平場は、等高線に沿うような細

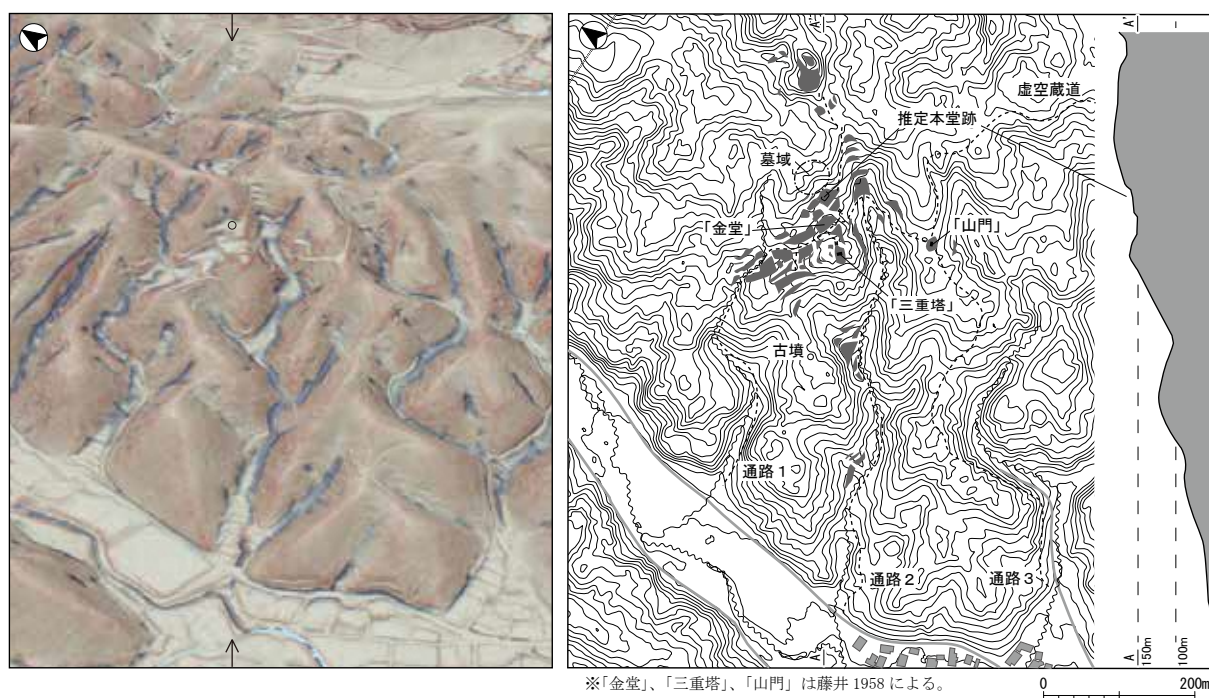


図 9 円興寺旧境内

長いものと、その最奥に階段状に展開するものが認められる。また、山腹にある平場は通路1の南北に展開し、「金堂」とされる平場の背面には石積みが残る。また、「鐘堂」とされる最奥の平場が最も高く、その法面には高さ数メートルの石積みを確認できることから、現段階ではこの場所に本堂があったと推定したい（以下、「推定本堂跡」と記す。）。推定本堂跡の中央には南面する基壇状の高まりが確認でき、その背面の斜面には墓域が展開している。一方、通路1の南側の高所には「三重塔」とされる平場があり、複数の礎石が確認でき、遠方を見渡すことができる。

円興寺旧境内では平成元～8年度に詳細分布調査がなされ、中世陶磁器や石製品が採集されている（大垣市教育委員会1997）。山茶碗は第5型式（12世紀後半～13世紀前半）以降の時期であり、墓域では経筒と考えられる遺物も採集されている。現円興寺には平安時代の早い時期の作とされる聖観音立像があり（清水1990）、寺伝によれば延暦9（790）年に仏堂が建立されたとあるため、その成立時期は平安時代前半まで遡る可能性がある。しかし、詳細分布調査では灰釉陶器が採集されていないため、現時点では、円興寺旧境内は少なくとも12世紀後半～13世紀前半頃には成立しており、採集された鉢や天目茶碗の時期から15・16世紀頃までは存続していたと考えたい。

なお、「山門」から「虚空蔵道」を経た先の金生山には明星輪寺が所在する。明星輪寺の本尊は虚空蔵菩薩であり、「虚空蔵道」の名称の由来となったと考えられ、円興寺旧境内の金堂付近から明星輪寺までは直線距離で約1500mである。明星輪寺は延暦20（801）年に再興したとされ、11～12世紀前半の地藏菩薩半跏像（清水1990）や久安4（1148）年銘の如法経碑、鎌倉時代の作である木造金剛力士像、明德癸酉（1393）銘の梵鐘など、多数の文化財が残る。そのため、明星輪寺は少なくとも12～14世紀には活動しており、円興寺旧境内と明星輪寺は尾根筋を利用した往来が可能であったと考えられる。

⑥弓削寺旧境内（揖斐郡池田町）（図10）

池田山の東山腹に展開する臨済宗の寺院であり、弘仁8（817）年に創建され、慶長7（1602）年に現境内に移転したとされる。寺院地は現境内を含めて3箇所を確認でき、それぞれ時期が異なる。なお、山麓の集落域と1時期目の主要堂宇との比高差は約120m、斜距離は約450mを測る。

最も古い寺院地（1時期目）は、現弓削寺から北西側の山腹に展開する。谷奥に幅約100m以上の広い平場があり、その南端に長さ約50mの基壇状の高まりが認められ、その背面には湧水点がある。この広い平場に主要堂宇があったと考えられ、その前面に延びる谷の両側にある尾根筋には、台形から三角形の平場が階段状に展開する。この寺院地では、過去に山茶碗、平瓦、三筋壺、四耳壺などが採集され（池田町教委1991）、近年では第4型式（12世紀中葉）以降の山茶碗が確認されている¹¹⁾。また、中世後期の石塔類が確認できないことから、現状では少なくとも12世紀には機能しており、15・16世紀頃には衰退したと考える。なお、この寺院地の山麓には平安寺が所在する。平安寺は応徳年間（1084～1087）の創建とされ、平安寺の墓地には14世紀代と考えられる大型五輪塔2基と永和元（1375）年銘、貞治5（1366）年銘の宝篋印塔が所在し（三宅ほか2011、横山1996）、現本堂の南側に複数の平場が確認できる。このように平安寺と弓削寺の1時期目の寺院地は同時期に存在していた可能性があり、しかも、平安寺の南東部で弓削寺から延びる複数の谷の水が1箇所に集まるなど、両寺は山上と山下にある信仰施設として関連があったと考えられる。

2時期目の寺院地は、現弓削寺から西側の扇状地上に遺構が確認できる。現弓削寺から高所に向か

って直線的に通路が延びており、その両側に通路に直交する方向に長軸を有する平場が階段状に展開する。その最奥は観音堂跡という伝承が残る広い平場であり、この付近に主要堂宇があったと推定する。また、その背面の斜面には石塔部材を含む集石遺構が確認できることから、墓域を形成していたと考えられる。なお、2時期目は直線通路や小型石塔の存在などから15・16世紀には機能していたと考えられ、この寺院地には金鑄場があったとされている。

3時期目の寺院地は現弓削寺境内である。慶長7（1602）年にこの地に移転しており、本堂の前面には直線通路が延び、その両側には細長い平場が残っている。なお、2時期目と3時期目の直線通路の軸線はややずれているが、2時期目の寺院地が現本堂の東側まで展開していた可能性もある。

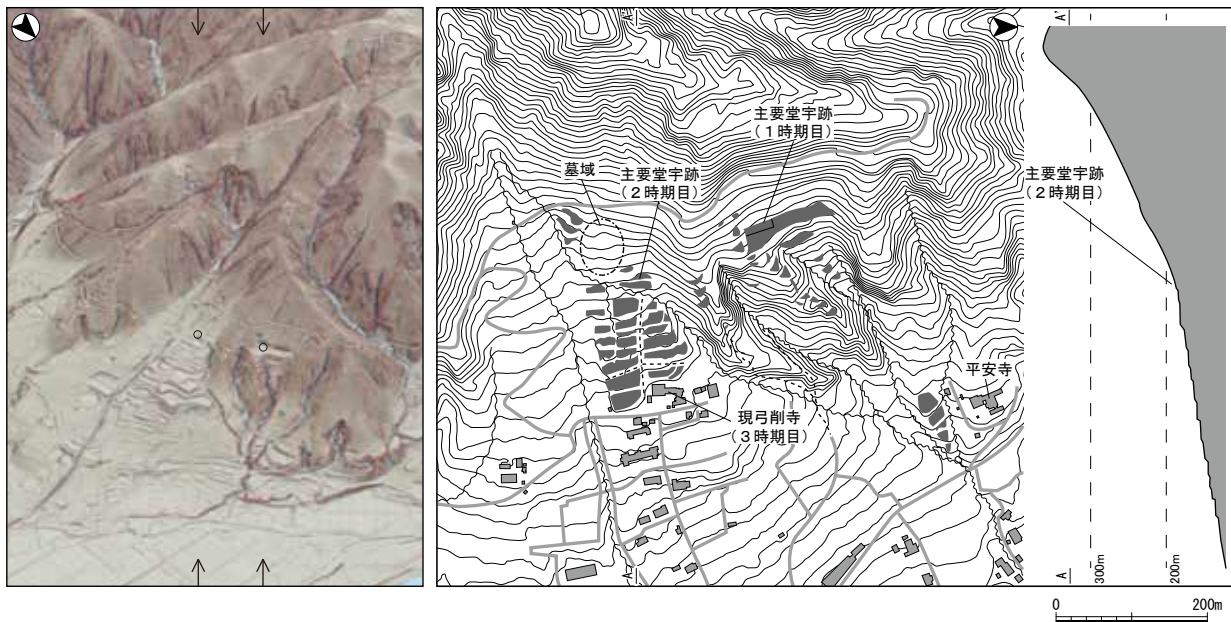


図10 弓削寺旧境内

(3) 山麓から山腹等に立地する寺院

①栗原九十九坊跡（不破郡垂井町、養老郡養老町、大垣市）（図11）

象鼻山から南宮山に延びる山地の、東山麓から尾根にかけて平場が広域に展開する天台宗の寺院であり、山麓の集落域と主要堂宇跡との比高差は約145m、斜距離は約550mを測る。本寺院は旧不破郡、養老郡、石津郡の郡境に位置する。天文14（1545）年に書き留められた文書の写しによると、鎌倉時代初期には久保双寺と呼ばれ、100以上の僧坊があり、建武2（1335）年の足利・新田の戦いにて焼失、あるいは織田信長の兵火により焼失したとされている。

山麓には水路を挟んで併行する2条の直線通路（通路1・2）があり、いずれも通路に直交する方向に長軸をもつ細長い平場が階段状に認められる。このうち、通路1に接する清水寺跡の平場が最も広く、ここには「美州不破郡栗原村清水寺奉鑄治鐘 宝治元年未丁九月廿日東大寺大工散位山河清衆徒」の銘が残る梵鐘があったとされるように、宝治元（1247）年以前には寺院が成立していたと考えられる。また、尾根筋には通路3があり、通路に沿って台形から三角形の平面形を呈する平場が展開し、山頂付近まで延びている。山頂付近には谷奥に広い平場Aがあり、そこには後世に集められた多数の石塔が積み上げられている。また、その北側の通路を進むと幅約75mの最も広い平場にたどり着き、ここには東西約14m、南北約16mの方形基壇があることから、主要堂宇があったと推定される。そ

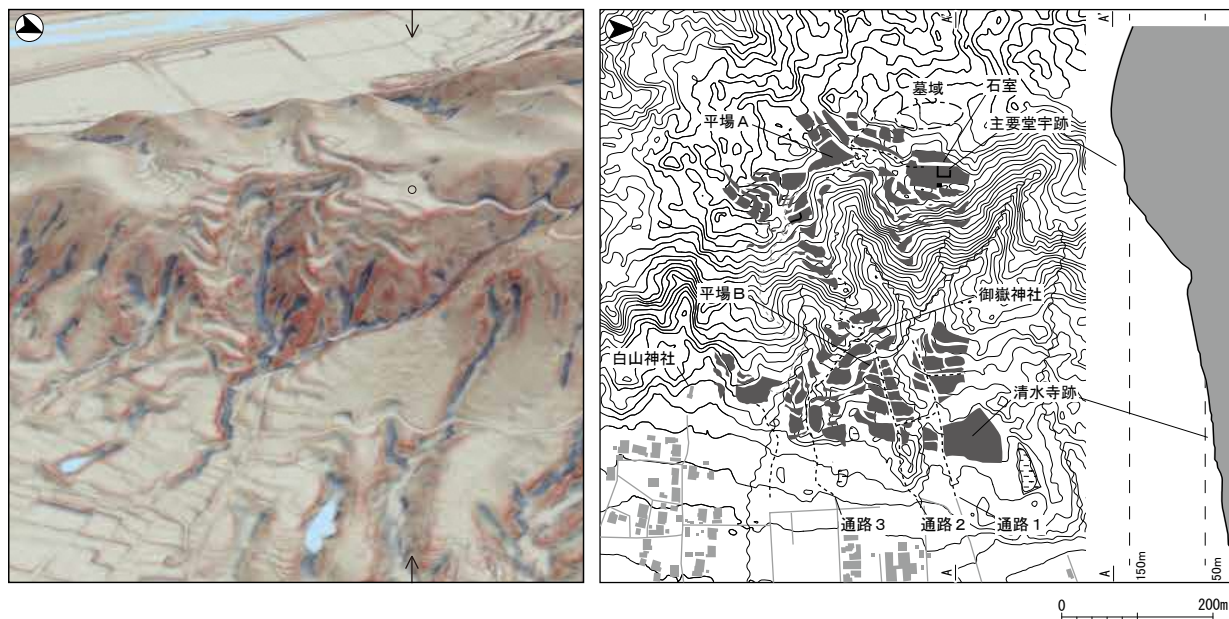


図 11 栗原九十九坊跡

の背面の斜面には角礫積みの石室（窟）が残り、さらに、その上部の尾根には墓域が展開し、石塔の部材が散在する集石遺構が広がる。

本寺院が位置する垂井町では平成 24 ～ 28 年度に遺跡詳細分布調査がなされ、本寺院からは須恵器や灰釉陶器、中世陶磁器などが採集された（垂井町教委 2017）。その成果は総合調査報告書（県文セ 2023）でも報告され、山上の平場 A と山麓の平場 B で 8 世紀の須恵器が分布していることが明らかにされている。また、山麓部では部分的に発掘調査が実施されている（県文財セ 2020）。これらの調査成果から、本寺院は 8 世紀頃には山麓と山頂において何等かの宗教施設があり、12 ～ 13 世紀頃には坊院坊舎が山全体に広がり、須恵器の分布域とは位置を変えて、引き続き中世段階も山上と山麓に主要堂宇が営まれていたと考えられる。

②桜堂遺跡・笹山遺跡（瑞浪市）（図 12）

桜堂遺跡は丘陵の南西斜面に位置する天台宗の寺院跡であり、山麓の集落域と本堂跡との比高差は約 50 m、斜距離は約 300 m を測る。桜堂遺跡は平成 23・25 ～ 27 年度に、笹山遺跡は平成 22 年度に発掘調査が実施され、桜堂遺跡からは寺院跡と中世墓、笹山遺跡からは経塚と中世墓が検出されている（瑞浪市教委 2014・2017）。

櫻堂薬師は、寺伝によれば弘仁 3（812）年に瑞櫻山法明寺として創建され、元亀 2（1571）年に兵火によって焼失したとされる。しかし、それらを裏付ける資料が現在まで知られておらず、発掘調査の結果、10 世紀中頃に小規模な堂宇が創建され、12 世紀後半から 13 世紀にかけて大きく発展し、15 世紀後半に堂宇が移動（下山）したと考えられている。本堂跡は山腹の平場の最高所に位置し、掘立柱建物跡が検出されている。また、本堂跡の北側には複数の細長い平場が連続し、集石を伴う墓域を形成している。一方、笹山遺跡は桜堂遺跡のある谷の入り口付近の丘陵上に位置する経塚・中世墓群である。12 世紀後葉から 13 世紀前葉にかけて山頂部に経塚が営まれ、12 世紀末から 15 世紀後葉まで山腹に集石墓群が継続して造営されている。

なお、桜堂遺跡の北から南西にかけての河岸段丘上には「多聞坊」や「西之坊」などの複数の口伝

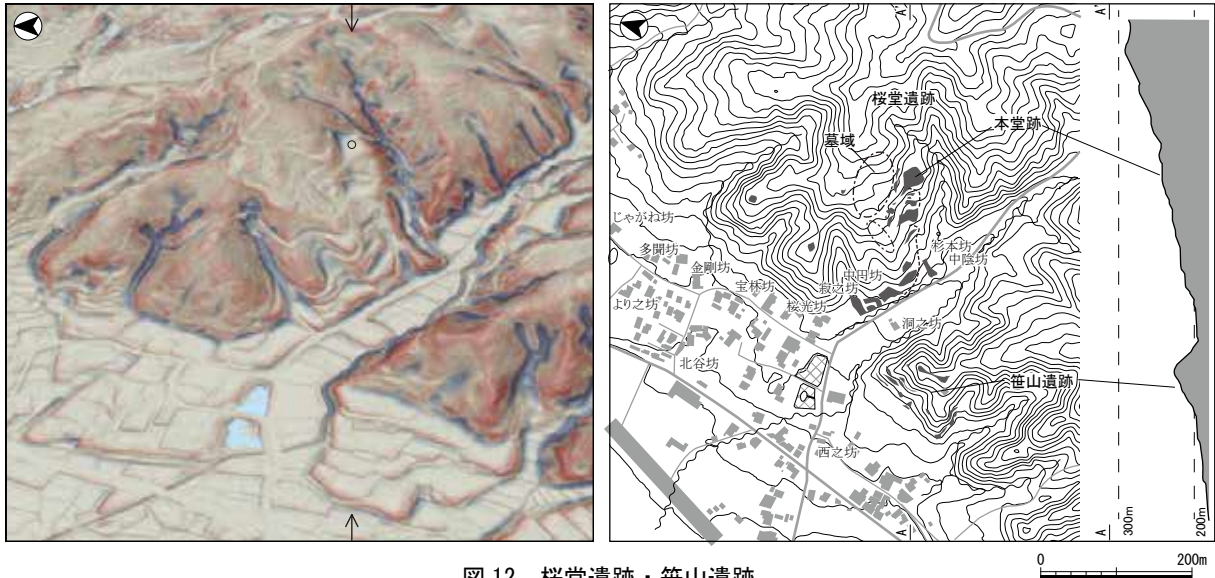


図 12 桜堂遺跡・笹山遺跡

等による私称地名がある。これらの場所では中世の遺物が採集でき、寛文5（1665）年の寺領寄進絵図にも幾つかの坊名が記載されていることから、桜堂遺跡が位置する谷・丘陵を核として、その前面の河岸段丘の参道に沿って坊院坊舎が連なっていた可能性が指摘されている。このように、桜堂遺跡における中世の宗教活動の場は、谷から山麓一帯が中心となっていた可能性がある。

(4) 山麓・山腹に立地する寺院の構造

山麓の緩斜面や山腹の斜面に位置する多くの寺院は、斜面を段切り造成して平場を形成し、堂舎等の施設を設置している。そして、斜面の傾斜が強いほど平場間の段差が大きく、平場の前後が急勾配となる（横蔵寺旧境内、円興寺旧境内、弓削寺旧境内（1時期目）、栗原九十九坊跡の山間部など）。一方、緩斜面での造成では平場間の段差が小さく、平場間の往来が比較的容易で、広い平場を確保できる傾向にある（柏尾廃寺、大威徳寺、栗原九十九坊跡の山麓部など）。平場の斜面には土留めのための石積みが認められ、特に主要堂宇や参道に沿った人の目に着きやすい場所には大きめの石材が用いられている（横蔵寺旧境内、威徳寺旧境内（垂井町：県文財セ 2023）、愚溪寺旧境内（御嵩町：県文財セ 2023）など）。

平場の平面形は、急傾斜地や谷筋では等高線に沿った細長い形状のものが目立ち、尾根上では地形に沿った三角形や台形状のものが目立つ。また、谷筋では山門から主要堂宇に至る通路が等高線に沿って延びていることが多く、通路を歩くと通路に沿うような細長い平場を視認できる（横蔵寺旧境内、円興寺旧境内、栗原九十九坊跡など）。一方、主要堂宇に向かって直線的に延びる通路も散見でき、通路に対して直交する方向に細長い平場が通路の両側に配置される事例（柏尾廃寺、竜泉寺廃寺、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡など）もある。これらは、通路間や平場の両端間の距離がおよそ 100 m 強であり、一町を基本とする単位で土地が区画された可能性がある。なお、このような地割は藤岡氏の平坦面分類の C 1 類に分類され、畿外での普及は 15 世紀以降まで降るとされている（藤岡 2012）が、竜泉寺廃寺の直線通路（通路 1）は、13 世紀末から 14 世紀前半頃に整備された可能性が高いとされており、今後の調査成果が期待される。

さて、主要堂宇のある平場は谷部の最奥や平場群の最高所に位置し、その面積も広く、基壇状の高

まりや礎石が認められることが多い。主要堂宇の建物や基壇の向きは、真南を向くもの（日焼遺跡、円興寺旧境内）と地形の傾斜に準じているもの（寺屋敷遺跡、柏尾廃寺跡、竜泉寺廃寺跡、白雲山観音堂、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡、桜堂遺跡）、谷の開口部を向いているもの（光寿庵跡、横蔵寺旧境内、愚溪寺旧境内）などがある。しかし、大威徳寺跡のように地形の傾斜に沿わずに山門から本堂までが真北を意識した構造の寺院もある。また、主要堂宇の前面には平場群が展開する事例が多く、これは他県の山寺の様相（久保 2001）とほぼ同じ状況であるといえる。さらに、西濃圏域の寺院では成立期に近い時期の遺物が平場群の最奥付近を中心に採集されており（柏尾廃寺、竜泉寺廃寺、横蔵寺旧境内、栗原九十九坊跡）、まずは緩斜面の高所や谷の最深部などの広い場所に小規模な施設等が造営され、その後、主要堂宇として機能するとともに、その前面に複数の平場が展開していくという土地利用の推移も想定できる。

なお、主要堂宇のある平場は山頂や尾根上にあることが稀で、多くは山頂付近の鞍部や尾根付近の鞍部に認められる。これは、寺院で活動する僧尼が居住や修学を行うための水の確保や、山頂に吹く強い風に対する防風などの目的があったと考えられる。特に水の確保は寺院経営にとって重要な要素であり、山水は仏にささげる聖水（闍伽水）にもなり（上原・梶川 2007）、光寿庵跡や横蔵寺旧境内、大威徳寺跡などのように湧水点から本堂脇の池へと導水している事例もある。また、湧水点から流れ出る水を含め、山水は谷川を介して山麓まで流れ、集落へと水を供給しており、山水の源にある寺院は聖なる場所として信仰の対象となる。さらに、谷川が山麓において1箇所合流する付近にも寺院が造営されており（柏尾廃寺跡、光堂寺廃寺跡、平安寺）、寺院が水利に関わっていた可能性も考えられる。

一方、主要堂宇の周辺には経塚や墓域が確認できる。寺院と経塚の位置関係が把握できる事例としては、寺域に至る入り口付近の高台に経塚が造成されるもの（桜堂遺跡と笹山遺跡（図 12）、増福寺と酒波神社経塚（瑞浪市：県文財セ 2023）、萬勝寺伝北ノ本坊跡と飯高経塚（恵那市：県文財セ 2023））と、主要堂宇の背面の山頂・山稜に造営されるもの（神光寺と洞雲戸遺跡（関市：県文財セ 2005））がある。また、柏尾廃寺跡や円興寺旧境内では墓域で経筒片が採集されており、主要堂宇の背面の斜面の高所に経塚が造営され、その周辺が後世になって中世墓群として利用されたと推測できる事例もある。その典型例としては笹山遺跡を挙げることができる。

集石と石塔が伴う墓域は、①主要堂宇の背面付近の斜面や尾根上にある場合（柏尾廃寺跡、円興寺旧境内、弓削寺旧境内、栗原九十九坊跡、桜堂遺跡）、②主要堂宇から谷や山を挟んだ離れた場所にある場合（光堂寺廃寺跡、横蔵寺旧境内、大威徳寺跡、笹山遺跡）、③主要堂宇と連続する平場の一面にある場合（白雲山観音堂）、④主要堂宇に至る途中の平場にある場合（美濃市西観音寺遺跡（美濃市教委 2012））などがある。発掘調査等は実施されていないが、筆者が現地を確認した③と同様な事例は清峰寺跡（高山市）、④と同様の事例は野上廃寺（垂井町）、円興寺旧境内（大垣市：源朝長墓・大炊家墓）、洞山寺跡（高山市）などがある。

2 寺院の存続期間と立地の変化

次に、発掘調査や詳細分布調査が実施された寺院における、遺構や遺物から推定できる存続期間と立地について検討したい。表 1 は、それらの調査成果が掲載された報告書をもとに、寺院の存続時

表 1 寺院の消長表

No.	圏域	市町村名	寺院名	立地	遺物の時期	7C	8C	9C	10C	11C	12C	13C	14C	15C	16C
1	西濃	垂井町	宮代廃寺跡	平地	7c中～9c?										
2	中濃	御嵩町	願興寺跡	平地	7c中～現代										
3	岐阜	岐阜市	長良廃寺	平地	7c後～		?								
4	岐阜	各務原市	野口廃寺	平地	7c後～8c										
5	飛騨	高山市	光寿庵跡	山腹	7c後～			?							
6	岐阜	各務原市	山田寺跡	平地	7c後～9c後										
7	飛騨	飛騨市	寿楽寺廃寺跡	平地	7c後～9c後										
8	飛騨	高山市	石橋廃寺	平地	7c後～10c										
9	西濃	池田町	高畑遺跡	平地	7c末～12c										
10	飛騨	高山市	三仏寺廃寺	平地	7c後～12c										
11	中濃	関市	弥勒寺跡	平地	7c後～15c										
12	東濃	恵那市	手向廃寺	山麓	8c										
13	飛騨	飛騨市	杉崎廃寺跡	平地	7c末・8c初～8c末・9c初										
14	飛騨	飛騨市	古町廃寺跡	平地	7c末・8c初～8c後										
15	西濃	垂井町	美濃国分尼寺	平地	8c中～9c末										
16	飛騨	飛騨市	上町廃寺跡	平地	7c末・8c初～9c後										
17	東濃	恵那市	正家廃寺跡	山麓	8c中～10c後										
18	飛騨	高山市	日焼遺跡	山腹	8c後～10c										
19	飛騨	高山市	三枝城跡	山腹	8c後～10c後										
20	西濃	大垣市	美濃国分寺跡	平地	8c中～12c末										
21	飛騨	高山市	飛騨国分尼寺跡	平地	8c～12c										
22	西濃	養老町	柏尾廃寺跡	山麓	8c～16c前										
23	西濃	垂井町	栗原九十九坊跡	山麓～山麓	8c～現代										
24	飛騨	飛騨市	西ヶ洞廃寺跡	山麓	9c後～10c										
25	西濃	揖斐川町	横蔵寺旧境内	山腹	9c後～14c前										
26	西濃	揖斐川町	寺平遺跡	山腹	9c後～10c										
27	西濃	揖斐川町	寺屋敷遺跡	山腹	10c～11c前										
28	東濃	恵那市	大船寺跡	山腹	10c～								?		
29	中濃	郡上市	白雲山観音堂	山腹	10c～15c										
30	東濃	瑞浪市	桜堂遺跡	山麓～山麓	10c中～15c後										
31	飛騨	下呂市	大威徳寺跡	山腹	10c～17c										
32	西濃	池田町	弓削寺旧境内	山腹	12c～								?		
33	西濃	大垣市	円興寺旧境内	山腹	12c後～15c?										?
34	西濃	養老町	竜泉寺廃寺跡	山麓	12c初～15c										
35	西濃	養老町	光堂寺廃寺跡	山麓	12c～16c										
36	岐阜	岐阜市	千畳敷遺跡	山麓	13c～15c										
37	東濃	恵那市	観定寺遺跡	山麓	13c中～16c前										
38	東濃	恵那市	大円寺跡	平地	14c前～16c後										
39	東濃	多治見市	永保寺寺院跡	平地	14c～現代										
40	岐阜	各務原市	承国寺遺跡	平地	15c中～16c前										

※参考文献は文書末に記載した。

凡例

 遺構が存続した時期
 遺物が確認された時期
 寺院の終焉時期が不明

期や遺物の時期を一覧表にしたものである¹²⁾。表1をみると、寺院及びその関連遺跡における遺構・遺物の始まりは、7世紀代、8世紀代、9世紀後半～10世紀代、12～13世紀代が目立ち、その終わりは8世紀代、9世紀後半～10世紀代、12世紀代、15～16世紀代が多いようである。そのため、寺院及びその関連遺跡の存続期間の画期として、7世紀代、8世紀代、9世紀後半～10世紀代、12～13世紀代、15～16世紀代の5時期を設定し、以下に各時期を概観したい。

なお、寺院は「地域社会の影響を受けて展開」(藤岡2012)しており、「里山、村里、水陸交通といった場での、社会生活に不可分な役割を果たしていた」(上川2014)とあるように、その存続期間を検討する上では地域社会の動向との比較が重要となるため、ここでは既存の集落遺跡の研究も加味して検討する。

(1) 7世紀代

美濃・飛騨において、寺院が創建される時期である。7世紀中頃から後半には、いわゆる川原寺式の瓦が入る前段階の瓦が確認された寺院として宮処寺跡、宮代廃寺、厚見廃寺、願興寺廃寺などがあり（井川 1994）、これらの寺院はいずれも平地に位置し、宮処寺跡と宮代廃寺、願興寺廃寺などはそれぞれ濃尾平野を西端と東端に位置する寺院といえる。また、7世紀後半には美濃・飛騨で寺院の創建数が増加し、その多くは平地に造営されている。特に厚見郡や各務郡では一郡内でも複数の寺院が造立され、各務郡の寺院は互いに同范関係も確認されていることから、建立に際しても密接な関係を有していたとされる（林 2021）。そのような中で光寿庵跡のみが山腹に位置していることは重要であり、すでに菱田氏が指摘しているように（菱田 2023）、光寿庵跡と石橋廃寺は山寺と平地寺院が一对となる存在形態の典型例として評価でき、畿内で形成された寺院間のネットワークの伝播（上原 2002）が確認できる一事例といえよう。

また、各務郡を中心とした美濃の集落遺跡の消長を分析した渡辺氏は、7世紀後葉が美濃における大きな社会変化の時期であったとし、須恵器生産の美濃須衛窯への一元化や古代寺院の造営などが同時期の集落の動向にも反映しているとした（渡辺 2003）。

(2) 8世紀代

国分寺・国分尼寺が創建される時期であり、7世紀代の寺院が確認されていない東濃圏域でも、この時期になって正家廃寺や手向廃寺などの寺院が創建される。8世紀代の寺院も平地に造営されることが多いものの、正家廃寺や手向廃寺などは現集落から数10 m程高い丘陵上に造営されている。

国分寺・国分尼寺周辺においては、美濃では栗原九十九坊跡や柏尾廃寺跡などで8世紀代の遺物が採集され、飛騨では日焼遺跡や三枝城跡などで鉄鉢や多口瓶など仏教的要素の強い遺物が出土している。これらの遺跡の特徴として、採集・出土した8世紀代の遺物がそれほど多くなく、遺構も判然としないことが挙げられ、山中には建物等がなかったか、存在したとしても草庵程度の小規模な建物であったと考えられる。菱田氏が「これらの諸寺に国分寺僧の活動を重ねることは妥当」（菱田 2023）としたように、これらの遺跡は国分寺から約10 kmの範囲内に所在し、僧尼の山林修行の場などとして機能した可能性がある。一方で、これらの遺跡の山麓付近の平地には、須恵器等の遺物が集中して分布する遺跡が近接している。具体的には栗原九十九坊跡の東側の栗原山麓遺跡（垂井町 2017）、柏尾廃寺の東側の戸関遺跡（養老町 2007）、日焼遺跡や三枝城跡の南側の野内遺跡（県文財セ 2009・2012）であり、このうち戸関遺跡の性格は郡衙もしくは寺院が想定され、野内遺跡の村落の形成には官衙（公的施設）などの関与が想定されている。このように、国分寺僧の活動が想定できる遺跡の近辺には一般的な集落遺跡とは異なる性格をもつ遺跡が展開しており、その居住者は国分寺を維持管理するための経済的な援助や僧尼の活動を支援するなど、国分寺僧と何等かの関連性があったと考えられる。

(3) 9世紀後半～10世紀代

山麓や山腹に多くの寺院（もしくは宗教施設）が造営される時期である。寺院の立地は多様であり、西ヶ洞廃寺のように山麓にある寺院や、寺平遺跡・寺屋敷遺跡・日焼遺跡のように8世紀代と同様な平地から数10 m高い位置にある寺院、横蔵寺旧境内・白雲山観音堂・大威徳寺跡・大船寺跡（恵那市）などのように、平地との比高差が100 m以上ある寺院などがあり、特に横蔵寺旧境内や大船寺跡など

は現集落域から 200 m 以上離れた山中に造営され、8 世紀代と比較するとかなり人里から遠い場所での寺院の造営が認められる。

しかし、寺院といっても桜堂遺跡では小規模な山寺が想定され（瑞浪市 2017）、大威徳寺跡や横蔵寺旧境内でも出土遺物の少なさから小規模な施設の存在が想定できる。また、白雲山観音堂や大船寺跡、三枝城跡も山頂付近の寺院（もしくは宗教施設）であるものの、数段の平場が確認できる程度の広さであり、この様相は平地から数 10 m の位置にある寺平遺跡、寺屋敷遺跡などでも同じである。つまり、この時期は斜面を切り盛りによって段造成し平場を形成しているものの、数段程度の小規模な造成に留まることから、現時点では山中にて平場が広域に展開するのは中世以降と考えておきたい。

なお、この時期には 7・8 世紀に創建された幾つかの寺院が廃絶している。特に飛騨圏域においては、発掘調査が実施された古代寺院のうち寺院に伴う遺構が中世まで継続する事例は確認されておらず、いずれもこの時期までに廃絶しているという特徴がある。飛騨圏域においては、先述した野内遺跡の遺構が 10 世紀後半頃に激減しており、郡衙に関わる中枢施設であった可能性が指摘されている上町遺跡も 10 世紀後半に集落が途絶するとされている（飛騨市教委 2023）ように、寺院と集落の盛衰が連動している状況が看守できる。

(4) 12 世紀～13 世紀代

山麓・山腹において、11 世紀以前から存続している寺院の寺域が拡大し、かつ複数の平場を有する寺院が造営され始める時期である。発掘調査や分布調査の結果、前段階以前に成立した桜堂遺跡や大威徳寺跡ではこの頃の遺構が広域に確認され、柏尾廃寺跡では遺物の採集場所が広がり、採集された遺物量も増えている。また、西濃圏域では弓削寺旧境内や円興寺旧境内、竜泉寺廃寺や光堂寺廃寺などの大規模な寺院の造営がこの時期から始まるようであり、同圏域にある 8 世紀から存続していた美濃国分寺や高畑遺跡などの伽藍を有する寺院の機能が認められなくなる時期に、その周辺の山麓・山腹に新たに寺院が成立・拡大する状況が看取できる。また、この時期は美濃における中世集落の開始期であり（内堀ほか 2002）、美濃における中世寺院の成立と寺域の拡大は、集落の成立と軌を一にしている。

さらに、この時期は、養老町域の寺院（柏尾廃寺、光堂寺廃寺、竜泉寺廃寺）が近接する谷ごとに大規模な寺域を形成し、寺院群として機能した時期でもある。このような谷ごとに寺域を形成する事例として、鎌倉時代の最盛期には「六谷六院、神社仏閣三十字、衆徒三百六十坊」があったとされる白山信仰の拠点である長瀧寺（郡上市）周辺も同じ状況であったと考えられる。

(5) 15 世紀～16 世紀代

古代や中世前期から存続していた山麓や山腹に位置する寺院の多くが衰退し、代わりに平地を中心に寺院数が急増する時期である。発掘調査や詳細分布調査の結果では、15～16 世紀代に山麓や山腹の寺院が衰退する事例が多く、同時期に新たに出現する寺院の調査例は少ない。一方で、総合調査の結果では 15 世紀後半における寺院の成立数が顕著で、その多くが平野や山麓に造営されている（表 2・3）。また、美濃における中世集落の多くは山茶碗第 11 型式（15 世紀中葉前後）までで廃絶し、それ以降は位置を変えて存続する可能性が高いと指摘されている（内堀ほか 2002）。15 世紀後半に新たに創建された中世寺院は現在の集落とほぼ重なる位置に多く認められることから、集落の集村化に

表2 時期別・圏域別の成立数（総合調査報告書（県文財セ2023）の数値から作成）

	700		800		900		1000		1100		1200		1300		1400		1500		1600		1700		合計
西濃	3	18	11	35	4	7	10	2	3	2	16	13	9	15	18	10	78	65	55	67	60	26	527
岐阜	20	25	8	18	4	3	4	2	0	3	20	26	12	13	23	13	71	60	78	63	43	25	534
中濃	6	27	3	7	1	5	8	1	2	2	8	7	15	12	21	13	46	40	75	54	46	22	421
東濃	1	3	2	2	2	0	1	0	0	3	3	5	1	10	9	7	6	12	32	36	22	3	160
飛騨	6	9	1	0	0	1	1	0	0	0	4	2	8	6	2	2	27	47	14	16	9	2	157
合計	36	82	25	62	11	16	24	5	5	10	51	53	45	56	73	45	228	224	254	236	180	78	1799

※横軸：西暦（50年単位）、縦軸：圏域

各圏域の合計数の1割以上の数値

表3 時期別の立地数（総合調査報告書（県文財セ2023）の数値を引用・合計値のみ追記）

	700		800		900		1000		1100		1200		1300		1400		1500		1600		1700		合計
平地	24	20	7	27	3	3	9	0	1	5	16	23	14	14	24	18	112	106	133	172	148	75	954
山麓	5	19	6	4	3	1	2	0	0	1	11	2	12	15	24	12	47	59	100	84	88	38	533
山腹等	2	6	7	6	1	2	5	3	2	1	3	0	4	5	9	5	2	3	15	9	13	4	107
不明	1	0	0	0		0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	4	3	1	3	1	15
合計	32	45	20	37	7	6	16	3	3	7	30	25	30	34	58	36	161	172	251	266	252	118	1609

※横軸：西暦（50年単位）、縦軸：圏域

伴い、寺院も現集落と重なった位置に造営されていったと考えられる。なお、15世紀後半には、西濃・岐阜・中濃・飛騨圏域において真宗寺院の興隆が際立つ一方で、真宗寺院が少ない東濃圏域では15世紀後半における寺院数の増加は認められない。そのため、この時期の寺院数の動向は、主に真宗寺院の布教活動と関連する可能性がある。

なお、養老町の柏尾廃寺跡では16世紀後半には主要堂宇や墓域での遺物採集がなく、同町の竜泉寺廃寺跡でも16世紀の遺物は主要堂宇で採集されていない。同様に、瑞浪市の桜堂遺跡でも15世紀後半には山中の本堂は別の場所に移動したと推定されている。その一方で、これらの寺域には16世紀代の石塔・石仏が多く認められ、特に柏尾廃寺では16世紀後半から17世紀代と考えられる石仏が1000基近く存在する（竹田2020）。このように、山中の主要堂宇の機能が低下してもなお多数の供養塔が寺域に納められたことは、寺院のあった場所そのものが後世になって信仰の対象地として認識され続けていたためであると考えられる。

おわりに

5年間に及ぶ総合調査では、県内の市町村史に掲載されている近世以前の寺院を網羅的に調べ上げ、その所在位置や時期を整理するとともに、主要な寺院の地形観察図を作成し、構造等を分析できたことに大きな意義があったと考える。これは、開発行為等との調整や遺跡の保存整備・活用のための基礎資料となることはもちろんのこと、本県の歴史や文化をさらに詳しく探求するための貴重なデータであり、他県の状況と比較する際の素材となり得る。この成果を総合調査報告書の刊行で終わりとせず、むしろこれを始まりとして、新たな調査研究や保存活用事業等を展開していくことが大切である。

その取組みを進めるために、小稿では総合調査における課題を研究テーマとして取り上げた。ここでは、詳細分布調査や発掘調査が実施された岐阜県の古代・中世寺院を概観し、その立地や構造、存続時期などの分析を試みたが、詳細分布調査にて地表面で観察できる遺構の特徴は、その寺院の最終

段階（廃絶時）の姿であり、遺構の変遷や詳細な時期の検討には限界がある。よって、小稿で提示した寺院の画期の設定は、発掘調査等の進展とともに見直しを図る必要があろう。今後のさらなる調査研究や事業展開に期待したい。

謝辞

小稿の執筆に際し、以下の方々からご高配を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます(五十音順、敬称略)。

今津和也、岩田崇、岩原剛、内堀信雄、大下永、大須賀広夢、押井正行、亀田剛広、上川通夫、後藤建一、竹田憲治、中島和哉、林正憲、菱田哲郎、廣瀬正嗣、藤岡英礼、松井一明、水谷豊、溝口彰啓、三宅唯美、三好清超、三輪嘉六、村木二郎、山路裕樹、横幕大祐

【令和5（2023）年4月校了】

注

- 1) 総合調査の期間中、筆者は岐阜県環境生活部県民文化局文化伝承課に所属し、総合調査を補助した。
- 2) 総合調査報告書では「平坦面」と表現しているが、場所によって面として人為的に形成されたか否かの判断が困難な場合もあるため、小稿では「平場」と表現する。
- 3) 小節で用いる挿図は、寺院が立地する地形や山麓との集落との位置関係を把握するために大縮尺で作成したが、平場の詳細については総合調査報告書を参照されたい。また、挿図では地形の理解を共有するために、令和3年10月に公開された「ぎふ森林情報 WebMAP」を活用した。なお、小稿での寺伝や縁起等の記載は、引用文献を示していない場合は原則として総合調査報告書からの引用である。
- 4) 小稿での土地に関する表現は、山路氏の提言（山路 2011）に従い、金堂・塔などからなる宗教空間と蔵・厨からなる運営空間を「伽藍地」とし、「寺院地」には伽藍地と園地などの「附属施設」を含める。また、寺が所有する一切の土地を「寺地」とし、寺地のうち「寺院地」以外の領地を「寺領地」とする。なお、寺域は寺院地の広がりを示す語として用いる。また、各寺院の平場に「金堂跡」、「本堂跡」などの既存の名称がある場合は引用文献を示した上でその用語を使用し、既存の名称がない場合は「主要堂宇」等の表現を用いた。
- 5) 養老町教育委員会中島和哉氏、廣瀬正嗣氏の御教示による。
- 6) 近年の研究では、光寿庵跡と石橋廃寺出土の素文縁単弁八弁蓮華文軒丸瓦は8世紀中頃以降に制作されたものと考えられている（三好 2019）。
- 7) このことは、すでに『国府町史』（国府町史刊行委員会 2011）や牛丸氏（牛丸 2011）、菱田氏（菱田 2023）の論考でも触れられている。
- 8) 引用文献に遺物の年代が示されていない場合は、既存の文献（愛知県史編さん委員 2007）を参考にした。
- 9) 久保智康氏は、古代の山寺に関して、平安時代に遡る仏像・仏具などの美術工芸品を伝える寺院で、その開山・中興伝承が平安以前に遡る場合は、少なくとも平安時代のある時期には活動していたとした（久保 2012）。
- 10) 寺院跡の踏査報告が藤井治左衛門氏によってなされ（藤井 1958）、氏が使用した堂等の名称は「」（カッコ）で示した。
- 11) 池田町教育委員会横幕大祐氏の御教示による。
- 12) 寺院の前身となる宗教施設の遺構が検出されている場合は、その時期から遺構が存続しているものとして示した。

引用文献

- 愛知県史編さん委員 2007『愛知県史 別編 窯業 2 中世・近世 瀬戸系』
- 井川祥子 1994「古代美濃国における軒瓦の様相」『岐阜市歴史博物館 研究紀要』8
- 池田町教育委員会 1991『池田町遺跡地図（改訂版）』
- 上原真人 2002「古代の平地寺院と山林寺院」『佛教藝術』265
- 上原真人・梶川敏夫 2007「古代山林寺院研究と山科安祥寺」『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院—』柳原出版
- 上原真人 2011「国分寺と山林寺院」『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館
- 牛丸岳彦 2011「清峰寺の立地と伽藍配置について」『応永飛騨の乱 600 年記念誌 姉小路と廣瀬』姉小路家・廣瀬家特別事業実行委員会
- 内堀信雄・小野木学・山田哲也・井川祥子・島田崇正 2002「美濃地域における中世集落の様相」『東海の中世集落を考える』第9回東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
- 恵那市教育委員会 2000『正家廃寺Ⅱ・寺平遺跡』
- 恵那市教育委員会 2018『正家廃寺Ⅲ・寺平遺跡』
- 大垣市教育委員会 1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書—解説編—』
- 大下永 2018「飛騨における中世山寺の空間構造について」『斐太紀』平成30年秋季号
- 小川榮一 1939「柏尾廃寺址」『岐阜縣史蹟名勝天然紀念物調査報告書』第八輯 岐阜縣
- 小野木学 2019a「小型五輪塔製作の一事例」『中世石工の考古学』高志書院
- 小野木学 2019b「美濃の一石五輪塔」『研究紀要』第5号 岐阜県文化財保護センター
- 加子母村 1972『加子母村誌』
- 梶川敏夫 2007「平安京周辺の山林寺院と安祥寺」『皇太后の山寺—山科安祥寺の創建と古代山林寺院—』柳原出版
- 上川通夫 2014「中世山寺の基本構造—三河・尾張の事例から—」『愛知県立大学日本文化学部論集』第6号
- 上川通夫 2023「文献からみた古代・中世の寺院」『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』岐阜県文化財保護センター
- 岐阜県教育委員会 1983『歴史の道調査報告書 南北街道』
- 岐阜県文化財保護センター 2001『寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2005『重竹遺跡・上西田遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2009『野内遺跡B地区』
- 岐阜県文化財保護センター 2012『野内遺跡C地区』
- 岐阜県文化財保護センター 2020『栗原九十九坊跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2021『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』
- 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 久保智康 2001「古代山林寺院の空間構成」『古代』第110号 早稲田大学考古学会
- 久保智康 2012「宗教空間としての山寺と社—古代出雲を例に—」『季刊考古学』第121号 (株)雄山閣
- 下呂市教育委員会 2007『鳳慈尾山大威徳寺跡 平成15～18年度範囲確認調査報告書』
- 下呂市教育委員会 2011『鳳慈尾山大威徳寺跡 平成19～20年度範囲確認調査報告書』
- 国府町教育委員会 2005『石橋廃寺調査報告書』

国府町史刊行委員会 2011『国府町史 通史編』Ⅰ

佐藤光一編 2019『白雲山観音堂』

清水眞澄 1990「岐阜県の仏像」『岐阜県の仏像』岐阜県博物館

斎藤忠 1996「いわゆる山寺の諸問題」『大知波峠廃寺シンポジウム事業報告書 平成7年度』湖西市・湖西市教育委員会

坂本廣博 1982「横蔵寺の歴史」『古寺巡礼 東国6 横蔵寺』淡交社

竹田憲治 2020「東海 中世末・近世初頭の石塔の展開」『中世墓の終焉と石造物』高志書院

垂井町教育委員会 2017『垂井町遺跡詳細分布調査報告書』（1）

富永樹之 2006「東国の「村落内寺院」の諸問題—千葉県以外を主体として—」『在地社会と仏教』奈良文化財研究所

名古屋大学考古学研究室編 1974『大和村の遺跡』大和村教育委員会

早川万年 2003「造寺と建郡」『美濃国戸籍の総合的研究』太洋社

林正憲 2021「美濃地域における古墳から寺院への変遷過程」『昼飯の丘に集う—中井正幸さん還暦記念論集—』

菱田哲郎 2023「他地域との比較からみた岐阜県の古代寺院」『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査』岐阜県文化財保護センター

飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』

藤井治左衛門 1958「円興寺旧趾を探る」『岐阜史学』第23号

藤岡英礼 2012「空間構造」『季刊考古学』第121号 （株）雄山閣

藤澤一夫 1956「寺址」『日本考古学講座』1 河出書房

藤澤良祐 2001「埋納された古瀬戸製品—特に大型壺・瓶類を中心として—」『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要』XVIII

文化庁文化財部記念物課監修 2013『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』同成社

瑞浪市教育委員会 2014『笹山遺跡』

瑞浪市教育委員会 2017『桜堂遺跡』

美濃市教育委員会 2012『美濃観音寺山古墳・長福寺遺跡・西観音寺遺跡・東観音寺遺跡』

三宅唯美・小野木学・中嶋茂・砂田普司・竹谷充生 2011「瑞浪市の中世石塔」『瑞浪市歴史資料集』第1集 瑞浪市陶磁資料館

三好清超 2019「飛騨における軒瓦の一樣相」『古代寺院史の研究』思文閣出版

山路直充 2011「寺の空間構成と国分寺—寺院地・伽藍地・付属地—」『国分寺の創建 思想・制度編』吉川弘文館

大和町教育委員会 1994『白雲山観音堂中世墳墓発掘調査報告書』

横山住雄 1996『岐阜県の石仏石塔』濃尾歴史研究所

養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』

養老町教育委員会 2016『竜泉寺廃寺跡分布測量調査報告書』

渡辺博人 2003「美濃の集落」『美濃国戸籍の総合的研究』太洋社

表1 参考文献（番号は表1のNo. に対応）

1 垂井町教育委員会 1973『史跡宮代廃寺跡発掘調査報告』

2 梶原義実 2022「願興寺本堂の発掘調査」『発掘調査講演会』御嵩町教委

3 岐阜市教育委員会 1999『城之内遺跡—長良公園整備事業に伴う緊急発掘調査—』

- 4 各務原市埋蔵文化財調査センター 1993『野口廃寺A地区の発掘調査報告書』
- 5 国府町史刊行委員会 2011『国府町史 通史編Ⅰ』
- 6 各務原市埋蔵文化財調査センター 2010『山田寺跡』
- 7 岐阜県文化財保護センター 2002『太江遺跡・寿楽寺廃寺跡』、同 2005『太江遺跡』Ⅱ
- 8 高山市教育委員会 2005『石橋廃寺調査報告書』
- 9 岐阜県文化財保護センター 2000『高畑遺跡』
- 10 高山市教育委員会 2003『三仏寺廃寺跡発掘調査報告書』
- 11 関市教育委員会 2009『国指定史跡 弥勒寺官衙遺跡群 弥勒寺跡 一講堂跡発掘調査 平成9・10年度一』
- 12 山岡町教育委員会 1988『山岡町文化財調査報告：山岡廃寺跡（手向廃寺跡）』
- 13 古川町教育委員会 1998『杉崎廃寺跡発掘調査報告書』
- 14 飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』
- 15 垂井町教育委員会 2010『美濃国分尼寺跡発掘調査報告』
- 16 飛騨市教育委員会 2023『上町遺跡8』
- 17 恵那市教育委員会 2000『正家廃寺跡Ⅱ・寺平遺跡』、同 2018『正家廃寺跡Ⅲ・寺平遺跡』
- 18 岐阜県文化財保護センター 2021『上切寺尾古墳群・日焼遺跡』
- 19 岐阜県文化財保護センター 2011『三枝城跡』
- 20 大垣市教育委員会 2005『美濃国分寺跡』
- 21 高山市教育委員会 1990『飛騨国分尼寺跡発掘調査報告書』
- 22 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 23 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 24 岐阜県教育文化財団文化財保護センター 2006『西ヶ洞廃寺跡・中野山越遺跡・中野大洞平遺跡・大洞平5号古墳』
- 25 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 26 岐阜県文化財保護センター 2003『寺平遺跡』
- 27 岐阜県文化財保護センター 2001『寺屋敷遺跡・磯谷口遺跡』
- 28 岐阜県文化財保護センター 2023『岐阜県古代・中世寺院跡総合調査報告書』
- 29 大和町教育委員会 1994『白雲山観音堂中世墳墓発掘調査報告書』
- 30 瑞浪市教育委員会 2017『桜堂遺跡一範囲内容確認調査報告書一』
- 31 下呂市教育委員会 2007『鳳慈尾山大威徳寺跡』
- 32 池田町教育委員会 1991『池田町遺跡地図（改訂版）』
- 33 大垣市教育委員会 1997『大垣市遺跡詳細分布調査報告書一解説編一』
- 34 養老町教育委員会 2016『竜泉寺廃寺跡分布測量調査報告書』
- 35 養老町教育委員会 2007『養老町遺跡詳細分布調査報告書』
- 36 内堀信雄 2021『戦国美濃の城と都市』高志書院
- 37 恵那市教育委員会 1991『観定寺遺跡発掘調査報告書』
- 38 井上喜久男 1982「岐阜県恵那郡岩村町大円寺跡出土の陶磁」『瑞浪陶磁資料館 研究紀要』第1号
- 39 多治見市教育委員会 2007『永保寺庫裡跡発掘調査報告書』、同 2011『永保寺本堂跡発掘調査報告書』
- 40 各務原市埋蔵文化財調査センター 2005『承国寺遺跡発掘調査報告書』